

広報えひな

防災は我らの手で



迫真的操法演技

(七月二十七日、社家小の市消防操法大会で)

小俣利男さん（社家、29歳）
慶正夫分団長（分団員15人）の
と話すのは、第二二分団（安

井中止し、消防活動に出動する
ことを何度も…。夜中でも遠く
でサイレンが鳴る気になります
ですね」

「火災に定休日はない、毎日
が待機日のよろづなもので」

分団の任務は消防活動だけで
分団へ入団、今までの出動回数
は約二十回。

小俣利男さんは、疲労を通じてみんなの役に立つ
と笑う小俣さんは、疲労を感じられず、むしろ、分団
で、大ぜいの気の合つ仲間を得ましたから

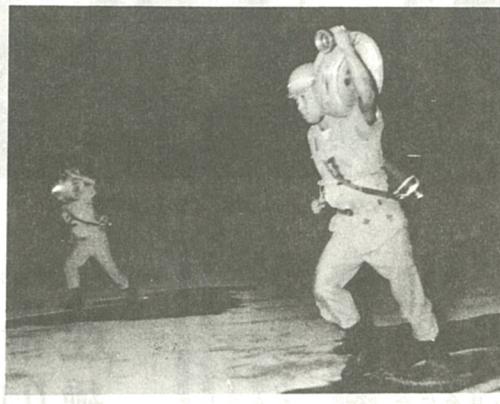
でも、分団に入団したお陰で、大ぜいの気の合つ仲間を得ましたから

いるときも、小俣さんたちの任務は続く。

でも、分団に入団したお陰で、大ぜいの気の合つ仲間を得ましたから

猛練習を続行

「操作！始め！」夜の社家小学校校庭に競合が入った号令が響き、同時に五人の男たちが決められた動作に従い敏捷に動する。操法訓練は、重さ八キロのボース二段を約五十㍍延長して水を出し収納する基本演技。操作時間が決められているのでゆっくり走るというわけにはい



訓練は夜間3時間に及ぶ（7月30日、社家小で）

八月一日、平塚市で行われた「第三十五回神奈川県消防操法大会」に市代表として出場した第十二分団（社家）が見事、優良賞を獲得した。今回は、大会に向けて猛練習を繰り返してきた第十二分団と、分団員の一人、小俣利男さんを取り上げた。

毎日が待機日

小俣さんは、以前、厚木市で会社勤めをしていたが、結婚とともに本市に転入。以来、義父と共に左官業を営み、県内各地で壁面、タイル張りなどの仕事をしている。六年前、もと分団員だった義父の勤めで第十二

回目は本業の左官仕事を…

ら隔日三時間の練習を始めた。同分団の県大会出場は、二回目。回目は昭和三十五年の第

十回大会、市内初

出場だった。実に

二十六年ぶりの出場に地元の期

待も大きくなり、もと分団員を含む多くの人たちが毎夜応援に駆けつけた。

二回目は子供と頬を合わせて

笑顔で見えた。二回目は

が少なくなりました。最近は訓

練後おみやげを貰い、子供の枕

元におくことが日課です」

と話す小俣さんの顔は、訓練

中からは想像できないやさしい

二児の父親の顔だった。

